

○篠原久枝 （宮崎大）

目的：従来幼稚園における教育はお絵描き、お遊戯などの情操系、体育系の教育が中心であったが、今日では「小学校受験」とは無縁な地方都市においても読み書き、算数、英語などの知育系の早期教育が浸透してきている。そこで、本研究においては、教育への関心が高いと思われる小学校入学前の幼稚園年長児の保護者を対象に、知育系を中心とした早期教育に対する意識について調査を行った。併せて教育者である園長先生の知育系早期教育に対する意識についても調査し、比較検討した。

調査方法：1997年11～12月 県内2市1町の主な幼稚園16か所の年長組の保護者に園を通して調査用紙を配布、記入後、園で一括回収した。配布数は830、有効回答数685、回収率82.5%であった。

結果：調査対象保護者において、早期教育に関心があり早期教育を必要とするものが半数を超えた。早期教育を必要と考える保護者の子どもの約7割が、不要と考える保護者の子どもの約3割が知育系の習い事をしてきた。幼稚園児において必要と思われる教育の内容については「カタカナが書ける」「小学校低学年の漢字が読める」「引き算ができる」などに必要群と不要群で差が見られたが、最も意識の違いが見られたのは「英語」についてであった。早期教育に賛成であれ、反対であれ子どもも教育の在り方について模索する姿が窺えた。